

# 学校改善と地域社会の役割—日本の経験と展望—

水本 徳明

筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授



## 1. 日本の学校—地域連携に関する歴史的な蓄積

### (1) 学校を主体とした地域・家庭への働きかけ

日本の学校は、歴史的に地域や家庭との連携を構築する様々な働きかけを行ってきた。その多くのものは、日常的あるいは定期的で継続的なものである。日本における学校と地域の関係を考える上で、そのような日常的な努力の継続を見落としてはならない。

第一に、学校は学校だより、学年だより、学級だより、保健だより、給食だよりなどを通じて地域や家庭に情報を提供してきた。学校だよりは地域の全戸に配布されたり、回覧されたりするところもある。第二に、教師が定期（通常年1回）や臨時（問題行動のあった場合や不登校の場合など）の家庭訪問を通じて、家庭や地域に対する理解を深めてきた。児童生徒が万引きなどの事件を起こした場合、教師が出向くこともある。第三に、授業参観や公開を通じて保護者や地域住民に教育活動を公開したり、学級懇談会（学級担任と保護者との懇談会）を開いたりして、学校への理解を深めたり、教師と保護者の意思疎通を図ったりしてきた。第四に、連絡帳や通知表、個人面談を通じて、ここの児童生徒の学校での様子や成長について日常的、定期的な情報の交換を行ってきた。第五に、PTAを組織し、会議、研修、旅行などを通じた教師と保護者の相互理解を形成してきた。PTAは校庭の整備など学校の諸活動に協力してきた。保護者以外の地域住民もPTAの会員になっているところもある。そのほか、運動会の地域のお年寄りを招待したり、地域行事で学校の吹奏楽部が演奏したり、行事を通じた学校と地域の交流も行われてきた。また、様々な地域の活動に体育館や校庭などの学校施設が使用され、地域住民にとって学校が身近なものと感じられてきた。

### (2) 地域における子育てと学校への協力

他方、地域でも様々な子育ての組織が形成され、活動を行ってきた。

伝統的な祭礼などでは子どもにも何らかの役割が与えられ、地域行事の担い手とされてきた。子ども会やスポーツ少年団は、娯楽的行事やボランティア活動、スポーツなどを通じた共同的な子育ての場となってきた。また、保育所、学童保育、公民館、図書館などの福祉施設や社会教育施設は地域における子育てと子どもの居場所づくりに貢献してきた。

地域は学校の教育活動にも貢献してきた。学校の教育活動のために田畑を貸したり、栽培活動に協力したりという形で、資源を提供してきた。歴史的に地域の資源で学校を設立し、維持してきた経験を持つので、「地域の共有財産としての学校」という意識がある。

## 2. 今日的状況：学校の教育課題の複雑化と地域社会の変貌

しかし、日本社会が経済的な豊かさを達成し、環境問題やグローバル化という変化に直面する中で、学校と地域を取り巻く状況は大きく変化している。

不確実で複雑な時代を生きていくために、知識を活用して考えたり、表現したりすることを重視するPISA型学力が求められるようになった。多文化化と経済格差の拡大の中で保護者の教育期待も多様化して

きた。地域社会自体も、都市部では人口の流動化、農漁山村では人口の減少と高齢化によって、従来の地域社会が成り立ちにくくなり、そこにおける教育機能が発揮されなくなってきた。

このような変化の中で分権改革が進められてきたために、個々の学校において複雑な教育課題に対応することが必要になっている。教育の質の改善のために学校の内部で多様なアイデアや試みが保持され、実現されなければならないし、そのための学校の組織力が構築されなければならない。改めて地域社会と学校を再定義し、両者の関係を再構築する中で、学校と地域社会の双方を再生することが課題となっている。

### 3. 学校改善のための地域社会の役割

#### (1) 学習の資源や機会の提供

近年、地域社会から学校への資源の提供が様々な形で拡大している。

第一は、学校内での活動のための人的資源の提供である。自治体によっては国の基準以上に常勤講師や非常勤講師を配置し、学級担任や教科担任、チーム・ティーチングや少人数指導に充てているところがある。地域の人材を特別非常勤講師として採用して、教科学習等での専門的指導を任せる場合もある。とくに最近増えているのが、学校支援ボランティアである。総合的な学習への協力、特別な支援を要する児童生徒の介助、国際理解教育への協力、図書館活動への協力、読み聞かせなど、非常に多様な目的のためのボランティア活動が行われている。こうした活動は、教師が子どもと向き合うためのゆとりを生み出している場合もあるし、逆に連携のために多忙化している場合もある。

第二は、学校外での児童生徒の学習活動の資源や機会の提供である。生活科や総合的な学習、社会科での地域学習などのために、児童生徒の視察や体験活動を受け入れたり、その場での指導に協力したりする。また、キャリア教育のための職場体験を事業所が引き受ける。

第三は、学校と福祉施設や社会教育施設の複合化である。施設を複合化することによって、児童生徒が福祉施設で体験的な学習活動をしたり、図書館等を学習活動で利用したりすることができる。

第四は、子どもの安全・危機管理のための資源の提供である。地域の家庭や事業所（コンビニエンス・ストアなど）が「子ども110番の家」という表示を掲げて、いざというときに子どもを保護する場所となる仕組みである。また、とくに登下校時に地域住民が安全パトロールを行ったり、散歩や自動車での移動の時に安全パトロールのステッカーを表示したり、旗を持ったりする取組も行われている。ある小学校長は学校周辺を散歩しているお年寄りに、学校の廊下を散歩コースに入れてもらうよう頼んで、週に何回か学校の中を歩いてもらった。そうすると、学校のリズムがゆったりとなるし、子どもたちにお年寄りをいたわる気持ちが芽生えてきたということである。

#### (2) コラボレーションを通じた創造性と感情的支援

そうした具体的な支援活動の基盤となるのは、学校と地域社会のコラボレーションを通じた創造性や相互理解、感情的（emotional）な支援である。

まず、地域の人々と教職員のコラボレーションを通じて、これからの学校や子どもたち、そして地域社会自体のビジョンを描くことである。実際、コミュニティ・スクールとなった学校ではそのようなビジョンづくりが行われているところもある。また、地域の人々が関わると学校全体の視野が広がり、多様な視点が組み込まれるため、学校運営や教育活動、行事の多様なアイデアが生み出される。

そうした中で、地域社会と学校の相互理解が進展する。保護者や住民は授業場面以外での学校の様子や教職員の仕事をほとんど理解していない。とくに校務分掌という形で教師が様々な運営的あるいは事務的な仕

事を受け持っていることや、多様な研修活動を行っていることなどは知られていない。そうした面で地域が学校を理解することが大切である。反対に学校が地域の生活や保護者・住民の思いに対する理解を深めることも重要である。また、感情面での理解と支援も重要である。教職は感情労働であり、近年では教職員の精神性疾患が増加している。地域社会が教職員の感情面での大変さを理解し、支援していくことも重要である。

結局、コラボレーションの中で学校教職員も地域住民も学習して変容して、更新されていくのである。学校と地域が確固とした実体としてあって関わり合っているとらえるのではなく、コラボレーションの中から双方が創発してくるのだととらえるべきであろう。そしてその中で子どもたちが育っていくということは、学校任せ、母親任せの教育を転換し、改めて教育を社会化することでもある。

### 3. 学校と地域のコラボレーションのための場のマネジメントとコーディネーション

以上のような活動を実現するためには、学校と地域社会がコラボレーションする場を作り出して運営し、そこに関わる様々な人と活動をコーディネートすることが必要である。

そのためには第一に、日本の社会がこれまで蓄積してきた学校と地域社会との日常的な関係づくりの経験を確認し、活性化することが重要である。様々な媒体を通じた学校と保護者・住民との日常的なコミュニケーションは、学校と地域社会のコラボレーションの基盤となる。

しかし、第二に、それだけでは今日の学校と地域社会のコラボレーションには十分ではなく、地域や学校の実情に応じて、学校運営協議会や学校評議員、学校支援地域本部などの制度を活用することが必要である。学校運営協議会制度や学校評議員制度は学校ガバナンスのための制度であると理解されるけれども、保護者や住民は学校のガバナンスや経営に関心があるとは限らない。地域における子育てや学校の教育活動により強い関心を持っている場合も少なくない。その意味では、そうした組織の活動において学校のガバナンスを重視しすぎることなく、子育てを核とした教育面でのコラボレーションと重視すべきである。そのために、学校支援地域本部や教育委員会による人材バンクなども活用して、様々な資源と活動をコーディネートすることが必要である。

以上のようなコラボレーションのためには、学校に関わるリーダーシップを再定義する必要がある。一人であるいは経営層の限られた人材でビジョンや目標を示し、人を動かしていくリーダーシップではなく、コラボレーションの場をデザインし、コミュニケーションを活性化し、議論を構造化し、民主的に決定する、場のマネジメントとファシリテーションこそがこれからの学校改善には求められる。

## 学校改善と地域社会の役割 —日本の経験と展望—

筑波大学大学院人間総合科学研究科  
水本徳明

(nimizumot@human.tsukuba.ac.jp)

### 歴史的な蓄積(1)

#### ：学校を主体とした地域・家庭への働きかけ

- ▶ 学校だより・学年だより・学級だより・保健だより・給食だよりなど  
学校だよりは地域全戸配布や全戸回覧のケースも
- ▶ 家庭訪問  
定期(通常年1回)、臨時の訪問を通じた、保護者との意思疎通と地域理解  
地域で児童生徒が事件を起こした場合、教師が出向くことも
- ▶ 授業参観・公開、学級懇談  
授業参観・公開を通じた学校理解、教師と保護者の意思疎通
- ▶ 連絡帳・通知表・個人面談  
日常的、定期的な情報の交換と意思疎通
- ▶ PTA  
会議・研修・旅行などを通じた相互理解、校庭の整備などの協力活動  
保護者以外にもPTA会員になる地域もある
- ▶ 学校行事への地域住民の招待・協力  
運動会・学芸会などへのお年寄りの招待など
- ▶ 地域行事への児童生徒あるいは教職員の参加  
地域の文化祭・運動会・敬老会などへの学校の協力、学校施設の公開

### 歴史的な蓄積(2)

#### ：地域における子育てと学校への協力

- ▶ 地域行事を通じた子育て  
地域の祭礼などの担い手としての子ども
- ▶ 子ども会、スポーツ少年団  
娯楽の行事やボランティア活動、スポーツなどを通じた共同の子育て
- ▶ 保育所・学童保育・公民館・図書館など  
福祉施設や社会教育施設における子育てと子どもの居場所づくり
- ▶ 学校の教育活動への資源の提供  
田畑の貸与、教育活動への協力
- ▶ 「地域の共有財産としての学校」という考え方

### 今日的状況

#### ：学校の教育課題の複雑化と地域社会の変貌

- ▶ 日本社会の成熟～経済的豊かさの達成、環境問題、グローバル化
- ▶ 学力観の変化—PISA型学力
- ▶ 保護者の教育期待の変化と格差の拡大
- ▶ 都市部における人口の流動性
- ▶ 農漁山村地区における人口の減少と高齢化
- ▶ 分権改革の進展  
↓
- ▶ 学校の内部的多様性と組織力向上の必要性
- ▶ 地域社会と学校の再定義、関係の再構築の必要性

### 地域社会の役割(1)

#### ：学習の資源や機会の提供

- ▶ 学校内での活動の資源  
常勤、非常勤の講師～学級担任や教科担任、TT要員として  
特別非常勤講師～教科学習等での専門的指導など  
学校支援ボランティア  
～総合的な学習、特別支援教育補助、読み聞かせなど
- ▶ 学校外での活動の資源  
生活科、総合的な学習などの場や教材、知識の提供  
キャリア教育の機会の提供～職場体験への協力  
複合施設化～学校と福祉施設、社会教育施設などの一体化
- ▶ 子どもの安全・危機管理のための資源  
子ども110番の家～地域の家庭や事業所が子どもを保護  
登下校時の見守り～安全パトロールとしての散歩や移動  
学校の廊下をお年寄りの散歩コースに

### 地域社会の役割(2)

#### ：コラボレーションを通じた創造性と感情的支援

- ▶ ビジョンを描く  
地域の人々と教職員のコラボレーションを通じて学校、子どもたち、地域のビジョンを描く
- ▶ アイディアを生み出す  
広い視野や多様な視点を組み込むことによって、学校運営や教育活動、行事のアイディアを生み出す
- ▶ 相互理解  
地域が学校を理解する～学校の課題、授業以外での教職員の仕事  
学校が地域を理解する～地域の生活、保護者や住民の想い
- ▶ 感情的支援  
感情労働としての教職の厳しさ(教職員の精神性疾患の増加)を理解し、感情的な面で支援する
- ▶ 相互の創発  
学校と地域のコラボレーションの中で学校も地域も学習して変容し、更新されていく
- ▶ 教育の社会化～学校任せ、母親任せの転換

学校と地域のコラボレーションのために  
：場のマネジメントとコーディネーション

- ▶ 日常的な関係づくりの重要性～歴史的蓄積の確認と活性化
- ▶ 学校運営協議会, 学校評議員, 学校支援地域本部などの制度の活用  
ガバナンス機能に偏らない  
子育てを核としたコラボレーション  
様々な資源と活動のコーディネーション
- ▶ リーダーシップの再定義～場のマネジメントとファシリテーション  
場をデザインし, コミュニケーションを活性化し, 議論を構造化し, 民主的に決定するリーダーシップ